高退協ニュース

高退協
事務局
2008・11・4
NO 155

〒780-0850 高知県高等学校退職教職員協議会
高知市丸ノ内2丁目11-10
TEL 088-822-1682 教育会館内高教組気付
郵便振替口座 01650-1-118932

温泉昼食会

今年は絵金蔵と黒潮温泉

今年は赤岡の絵金蔵と野市の黒潮温泉へ行きました。参加者は十三名でした。まず暗い蔵の中へ提灯を持って入ります。提灯と言ってもロウソクに火をつけるのではなくて、提灯の柄のボタンを押すと点灯し緩めると消えます。絵師金蔵は芝居絵のみ描いたと思っていましたが、今回行って笑い絵も名作を残したのを知りました。笑い絵は漫画というか一目見ると笑いを止めることができません。たとえば放屁合戦がありました。数人の男女が裸の尻を天へ向けて放屁合戦です。この場合女性の勝ちです。女性の尻が大きいから勝ったというのは、へ理屈です。また高齢者が見ても反応が弱いが、大和撫子が見ると顔が赤くなる性を表現した絵の展示もありました。

温泉はぬるぬるして温泉らしいお湯でした。昼食は天ぷらや刺身があり値段の割には美味しい料理でした。近くに住む溝渕乃婦さんと橋田晃一さんが仕事の合間を縫って駆けつけました。有難うございます。

帰路喫茶店へ行き、コーヒーを飲みながら近況報告をしました。転倒して顔を打ち大きくはれあがったが元通りきれいに治ったとか、大腸がんの手術など怪我や病気の話がありました。

（三谷）

草声老話

大分県の教員汚職の実態には全くうんざりさせられる。

学校および県教委の関係者の間に共通している「公平さとは無縁の感覚麻痺」と「社会人としての品位のなさ」には絶望的な気分にさせられるが、「不正・汚職は絶対に許さない」という体質を育て維持できない県教委内部に一番の責任があることは疑いない。

不正合格で辞職対象となった二十一人に対して、私の周辺（知人）には「当人も絶対知らんはずがない。彼らのせいで・・・」と突き放す声が多い。確かに汚職がなければ本来は採用されたはずの二十一人の受験者が一番の被害者であることに間違いはなく、突き放したい気持ちは分かる。

でも、当人の知らぬところで「口利き・加点」がなされていた者がいた場合には同情せざるを得ない。なぜなら、適正に「不合格・不採用」の通知を受けたなら、その時点で後の人生設計に取り組めたはずで、今回の汚職にも巻き込まれずに済んだはずで、彼らも間違いなく犠牲者なのだから・・・。

高知県の学校現場でも大分県の教員汚職は話題になっているようで、元大崎県教育長は口利きを申し出た者に「こんな話を聞いた時点で不合格にしたい気分だ」と言葉を荒げて突き放したことがあるという話も伝え聞いた。その一方、かつては特定の団体組織の教員採用等に関する不当な圧力に対し橋本前知事が毅然と対応し、その影響力を阻止したという噂も耳にしたし、市・県教委寄りの教職員組合の幹部歴任者が管理職に多く登用されるといった傾向も、小・中・高を通じて長い間引きずってきたように思われる。また各教委・学校現場の都合で、時には「使い捨て」の感さえするような厳しい立場に置かれている臨時教員の扱いについての課題も残されている。

高知県の採用試験等についての情報公開の制度化は全国的にも早かった方で、少なくても大分県のようなひどい汚職は無いだろうと感じているが、高知県だってまだまだ課題は皆無ではないはずだ。教職員組合も、「反対のための反対」ではこまるが、教育行政・学校運営に関して「それはおかしい」、「こうあるべき」と言える本来持ちうるべき主体性を回復すべきではないだろうか。（西森貞雄）

初歩きと新年会のご案内！

恒例の、高退協・山の会合同の初歩きと新年会を次の要項で行います。ふるってご参加下さい。

＜初歩き＞　錦山ドウダンツツジ公園

コース：　日高村：小村神社前―錦山CC（ゴルフ場）―霧山茶園―錦山公園
（約7キロ―大半が舗装された車道、錦山公園に保養センターの送迎バスあり）
日　　時：2009年1月6日（火）10：40～15：00
集合場所：土電千本杉バス停（JR小村神社駅すぐ）
あ　　し：JR土佐山田―ごめん―高知―いの―小村神社前
8:45　9:08　9:30　10:14
JR須崎―佐川―小村神社前
8:45　9:52
土電バス堺町（岩目地行き）―小村神社前
9：21　9：58
持ち物：弁当、飲み物、おやつなど
写真代：　200円

＜新年会＞

場所、時間：いの簡易保養センター　17：00～19：00
（帰りは、朝倉駅、はりまや橋経由で高知駅までの送迎バスあり）
会　　費：6000円

＜申し込み＞
連絡先：上岡　績　TEL　088－803－7681
土居正明　TEL　088－844－2444
締切日：12月20日
備　考：①初歩きのみ　②両方参加　の別もお願いします
少雨決行　　（新年会のみも歓迎）

第8回高退協すき一旅行ご案内

09年のすき一旅行を今回は、東北安比スキー場にしました。

具体的な要項は別紙通りです。

少しでも滑られる方、また沢山の参加をお待ちしています。

後期高齢者医療制度廃止・療養病床削減反対県民集会の参加報告

後期高齢者医療制度廃止・療養病床削減反対県民集会が、10月13日に高新文化ホールでもたれました。これは県民集会実行委員会（事務局：高知県革新懇）の主催で、高知県医師会、高知保険医協会、高知市老人クラブ連合会、四万十市老人クラブ連合会、土佐清水市身体障害者連盟の協賛を得て実施されたものです。そのなかで、田中きよむ氏（高知女子大学教授）は、後期医療制度の特徴と問題点について、「2006年医療制度改革等により、56兆円を48兆円に削減、削減8兆円のうち後期高齢者分で5兆円削減を患者負担の引き上げ、診療・検診制限、療養病床削減で実現しようとしているものであること、なによりも現代版「うば捨て山」の制度であり、介護・後期・国保・住民税の徴収強化の四重苦による「エイジング・プア」、応益負担による低所得者からの徴収と資格証明書（保険証の取り上げ）という「医療生存権」の侵害など多くの問題がある」と話されました。

田中誠氏（上町病院長）からは家庭内介護の深刻な実態の紹介と、療養病床削減をめぐる経過など、資料に基づいた話があり「年を取れば人に迷惑をかけるのは当たり前。高知の厚い療養病床体制は高知の文化であり、高知県は高齢社会の先進県」と療養病床の削減を批判する発言がありました。講演終了後会場からの多数の発言があり、もう少し参加者が多ければもっとよかったのですが、怒りとともに廃止に向けて戦っていくことが確認された熱気ある集会でした。

土居　康男

旅考日記（抄）

～気ままに、つれづれに～

小澤　幸泉

「金銭は無い・健康でない・暇が無い」三無いづくしの私には、旅行など夢のまた夢、高嶺の花である。そんな私ではあるが、生活費を切り詰めて小銭が貯まると、学割を使って、ぶらりとでかけることにしている。

九月は二泊三日、一泊二日の2回、行き先は大阪（和泉）、滋賀（近江八幡）そして奈良（西の京）あたりである。

十三日（土）○西国第三十一番番長命寺を訪問、♪汚れのうつし世とおく去りて、語れわが友よ熱きこころ」口ずさみながら八〇八段の石段を参道を登りつづけた。幾度訪ねても心が洗われる。《道程も味わい深い自然崇拝の寺。琵琶湖を臨む山上より健康長寿を祈願》した

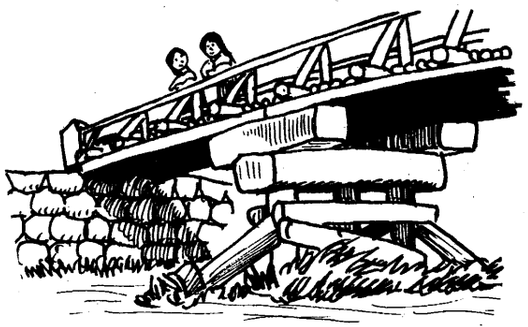
十四日（日）鶴彬（プロレタリア川柳作家）顕彰碑　建立植樹（除幕式）参列した。衛戍監獄跡地治安維持法で留置されていた）『暁をいだいて闇にいる蕾み（鶴彬）』百日紅（赤、白、紫）が美しく咲いている。川柳大会『夢半ばされど彬は生き続け（幸泉）』祝賀会で交流を深める。

十五日（月）○西国第四番施福寺を訪問。修験の道場として発展、弘法大師が得度したという山寺、西国随一の難所である、とにかく歩かなければ、観音様に近づけない「たどり着けば、そこは雲上の極楽浄土」

十六日（火）○先達委員会より特別展「西国三十三所観音霊場の祈りと美」の招待案内（奈良国立博物館）。西国第九番南円堂訪問後、（西の京）薬師寺訪問、四十年振りの再訪、故 高田好胤管主により平和の祈りをもって、発願され、見事に復元された、《白鳳伽藍》《玄奘三蔵伽藍（大唐西域壁画（平山郁夫作））》、《薬師三尊像、聖観音菩薩像》の荘厳さ。唐招提寺初訪問。

二十二日（月）○「その神は幾世経むらん　便りをば　千歳もここに　松の尾の寺」初訪問は紅葉が美しく映えていたころだった。二回目は、積雪で麓から引き返してきた。今回は早く着き過ぎて乗り遅れタクシーで山上まで。「赤れんが博物館」や「引き揚げ記念館（公園）」は前回訪問している。

二〇〇八年十月二八日



相撲ミニ知識（八十五）

林　勤

相撲協会八十年を振り返る

九、昭和五十六年～六十年

昭和五十六年

○一月　「昭和の名大関」そして「若・貴の父」貴ノ花引退。

○二月　横綱輪島、大関増位山引退。

○九月　第58代横綱千代の富士登場。

昭和五十七年

○七月　ハワイの怪童小錦初土俵九月には序ノ口優勝。

昭和五十八年

○一月　第56代横綱（二代目）若乃花引退。

○九月　新横綱隆ノ里（第59代横綱）史上初の新横綱十五戦全勝優勝（双葉山も新横綱全勝優勝（昭和十三年一月）であったが、その時は十三日制）。

昭和五十九年

○十月　新国技館（東京両国）定礎式。

○十月　蔵前国技館（昭和二十五年春場所からの仮設を経て昭和二十九年九月完成）閉館式。

○十一月　新国技館（東京両国）引渡し式。

○十二月　新国技館相撲教習所開所式、土俵祭。

昭和六十年

○一月　新国技館東京両国に開館

・初場所、横綱千代の富士十五戦全勝優勝。

・第55代横綱北の湖引退（一代年寄「北の湖」となる）

○三月　本県出身大関朝潮初優勝（優勝決定戦で若嶋津を破る。朝潮はその他優勝決定戦に三度（千代の富士と二回、琴風と一回）出たが優勝はこの場所のみ）。

○七月　七月場所十四日目の七月二十日、青葉城が初土俵以来通算連続出場一五四三となり史上一位（最終記録は一六三〇）。

○十二月　元横綱（第54代）輪島廃業。

全国女性教職員学習交流集会に参加して

十月十一日・十二日の二日間、岐阜に五百名あまりの女性教職員がつどいました。

岐阜は、山があり、お城があり、川が流れ、あまり高いビルがなく、なんとなく親しみを覚える落ち着いたまちでした。また、鵜飼いの最終週だそうで、夜は舟の灯りがきれいでした。

一日目の講演は、映画監督の大澤豊さん（演題―映画「日本の青空」と憲法）でした。沖縄戦、学童疎開、原爆等を扱った作品のいくつかのシーンを見せてもらった後、なぜ映画をつくったか、運動と結びつける制作・上映の方法、憲法制定の経緯、憲法を守り生かしていくことの大切さなどのお話がありました。

二日目は、基礎講座「いきいきとはたらくために心と体のバランスを考えよう」に参加しました（講師―産業カウンセラーの大槻久美子さん）。ここのところ精神疾患による休職者数が大きく増加しています。ストレスの現状やメンタルヘルス対策、特に気づきの大切さなどについて学習してきました。

セルフケアは必要だと思いますが、多忙化をすすめ、縦の指揮命令系統を強め、成果主義賃金を導入しでは、事態は悪化の一途でしょう。必要なのは、上から力でねじふせるようなやり方ではないはずです。

高知県からは十三名の参加でしたが、夜の交流会ではビールが乾杯分ぐらいしかないのがもの足りなく、お昼を食べた岐阜駅の自然派ビュッフェ？のお店がとても好評だったことも、付け加えて報告します。

三月末の「いきいきさわやかレディのつどい」にはたくさんの皆様に参加いただきありがとうございました。この場をかりてお礼申し上げます。なお、女性部恒例の「音楽とディナーのゆうべ」ですが、これまでの会場がピアノを処分していたり、ピアノの使用料が必要になったりで、予算面から今年は見送ることにしました。高知もなかなか競争が激しいようです。今後とも高教組女性部をよろしくお願いいたします。

（竹島久美）

高教組女性部書記長

活動誌

【九月】

二日　事務局会
六日　教育署名開始
八日　戦争を語り継ぐ集会
十一日　夏季講座

【十月】

七日　事務局会
八日　高齢者大会
十五日　県温泉・昼食会

訃報

井上寿枝さん　八・二六逝去
近藤光亀さん　九・三十逝去

慎んでご冥福をお祈りします

俳句

八月十六日　土曜
いの町土佐和紙工芸館

合田　青幹

鮎を釣る一級河川眼下にす
キャンプ張る緑のテント
黄のテント

吉本伸秋

つま紅や楮釜築く竈古り
和紙の里た走る水のいよよ澄む

中内みち代

新涼や大釜二つ草木染め
古民家の筬打つ音や涼新た

小笠原さちを

手作りの団扇も作る紙漉場
機織女くつろぐ庭の
ハンモック

九月二十日　土曜
南国市国府　紀氏邸跡
国分寺

合田青幹

爽やかや一軸一行判読す
石榻に在り新涼をほしいまま

吉本伸秋

水琴に和すや澄みゆくちちろ虫
鋤かれたるままに穭の
熟れ初むる

中内英明

大寺の榎の実椋の実鳥騒ぐ
まほら野の国衛は何処彼岸花

中内みち代

内苑の心礎が主石秋気澄む
秋草の野のおもむきを活くれし

小笠原さちを

大伽藍鷹の渡りを指ささる
曼珠沙華廻り道して遍路来る

短歌

まづ頼む杖　榊原忠彦

まづ頼む杖は石楠花別府峡の
紅葉茶屋での苞と求めし

「御名御璽」などと所信表明で
使う新首相仮り免内閣はむかし
の破船

城山高の縁懐かしき絵金蔵提灯
で見るおどろしき絵を
（十月十五日高退協の皆さんと）

●こむぎ（富）

川柳（十句）

雑草の抄二

小澤幸泉

赦し合う夫婦になって枯れて行く
娘の重荷せおって我は軽くなり
ささやかに生きる暮らしを知った朝
父いまだ孤独になれず子に甘え
サフランの花咲き赤子の声うれし
終章（エピローグ）を書き継ぎ
今日も暮れてゆく
白地図を埋める時間が少なすぎ
過ぎ行けば見ゆなつかしく美しく
ひまわりに地球を何と映すかな
病院へ行った帰りに飲んでくる

スローライフに遠く

山本晶子

貧すれば愛は窓より逃げてゆく
教え子言うを黙して聴けり
吾が肺の十パーセントは回復せず
と医師の言いたり疲れやすかり
追いかけられ追いかけられて生
きてゆく玉葱くさり梨はしなび
て

08高退協温泉昼食会

叶岡淑子

紺碧の空もさわやか赤岡へ十三
人は今日みな青年部
絵金蔵オッソロシクテ美しい
穴の向こうの極彩色の絵
好きずきのティー楽しみてこも
ごもに近況語る錦秋のとき

健康法

検診の勧め

島本 聡

２００４年夏のオークランド空港のできごとである。前日、最終便でここに１泊して、余裕もって出国手続きを取る予定であったのだが、クィーンズタウンからの最終便が突然欠航になり、薄氷を踏むような乗り換えになってしまったのだ。「先に手続きを取っているからあとから来てください。」と言い残して国内線ターミナルから、国際線ターミナルに先に走って行った添乗員兼スキーインストラクターのＳ氏を追い掛けて、私たち六人がバラバラになって、搭乗口に向かって走っていく。国際線ビルに入るや人並みの中Ｓ氏を捜せない。英語が話せない私は、恐る恐る切符をだし搭乗口を聞くと、指をさしてくれたので、背の高い外人を押しのけ押しのけ小走りにそれらしき窓口を探し探し走った。行けども行けどもそれらしいものがない、丁度のところに案内所があった。またしても切符を見せ、この便はどこかと身振りで聞くと、「すでに済んだ」らしいことを云う。身体の力が抜けてしまう。そのときである、「しまやん、しまやん、しまや～ん」　日本語、いや土佐弁の声が、外人の人垣の向こうから、近づいてきた。その怒鳴るようなＨさんの声が何と美しく懐かしい響きに思えたことか。案内人はこの便はすでに到着したと云ったのだった。やっと日本への便に乗れた安堵感と本来のけちな性格からか、機内で出される飲み物や弁当を残らず食べては、寝、食べては寝を繰り返した。終戦後の食糧不足で弁当はふたにくっついたご飯から食べはじめ、何でも残さず食べる。この習慣が、１０年以上寿命をのばすことになったのである。

帰宅後、胃がむかむかとし、痛み出した。翌日学校に行くと、胃の検診に行くよう事務長よりお達しがあった。断っていたはずだが、まあ胃が痛むので見て貰おうと覚悟し、型どおりの検診を受ける。バリウムを飲む、ヨーグルトで育てた腸内細菌の死滅だ。検査の結果が届いた。「要再診」。まあ胃も痛むことだし、とこか胃カメラでも撮ってもらうか。南高校勤務の頃に見かけていたあまり混んでない病院を思いだした。カメラを操作するのはもちろん院長一人１人。上手だ。大腸の曲がり角ごとに激痛を覚えた川之江の大腸検査と違い抵抗もなくすっとフアイバーが入り、胃の映像が写しだされる。「少し出血していますが、これは胃炎で、たいしたことはありません、はいここが十二指腸の入り口です、それでは戻ります、あ、すこし変なところがあります。良性だとおもいますが、念のため組織をとって検査に回しておきます。」ところが２週間後院長が「検査の結果、組織は悪性でした。」と済まなさそうに電話してきた。いわゆる癌である。あわて胃癌に関する本を探す。胃癌はその進行状況で４段階にわけて考えるようである。初期の胃癌は５年生存率９２％以上だ。楽天家のわたしは、残りの８％に入ることなど、皆無。家から近い市民病院で胃の摘出手術を即決めた。手術担当の医師が「良くこれを見つけてもらえたことですね。ごく初期で発生箇所も中部であるので、１／３は残しておきましょう。」私の頭の中では生存率９９％にまで上昇していた。手術後の説明を受ける、イカの胴体のような胃の写真をしめしながら「スキルス胃癌でかなり広がっていました」。縫い合わせが合っていない腹の切り口を押さえながら「取り残しで再手術ですか」と聞く。「いやぎりぎりで大丈夫と思います。」脅かすまい。わたしの５年生存率は６０パーセントにまでさがってしまった。平均寿命との中をとってあと１０年は生きることにしようか。　退院後妻の食事制限はますます厳しくなった。「うどんやラーメンの汁は、残す、寝る前は、食べてはいけない、漬け物は１日３切れ、魚や、梅干しや、たくわんには醤油をかけるな。」とうるさく云われる。あと１０年だから好きなことをやり好きな食べ物を食べ自由に生きたいのだが。死ぬまでにやりたいことの中に「３年もののたくわんに、鰹節と醤油をたっぷりとかけ、まるまる１本食べる」が加わった。

追伸、先日高退協恒例の昼食会の席で今年米寿を迎えられた大Ｈ先生に健康で長生きの秘訣を伺ったところ「好きなようにして、女房の云うことをきかんことじゃ」と云っておられました。感銘。プラス献身、検診、検診。

夏草や　つわものどもが
踏みし道

高知市の西北に国見山（九二五米）、別名雪光山がある。マッターホルン型の三角錐の山で、多くの人々に登られてきた名峰である。この雪光山の南隣に屋根型の無名峰（七三九米）がある。近くの地名から敷ノ山と呼ぶことにする。雪光には手水から登り降りするのが一般的なコースであるが、昔から山のベテラン（つわもの）が辿っていたコースにこの敷ノ山縦走の道がある。素人には手強い道で、長い藪こぎを強いられる。思い出話になるが、かつて、わが「山の会」も試登したことがある。同行者は四名であったと思うが、悪戦苦闘を強いられて、予定していた計画を諦めた。爾来、私個人の念願として、滓のように心の隅に漂っていた。昨年の骨折事故以来、毎朝散歩を続けているが、そのコースの一つに、この敷ノ山の散策がある。何回か挑戦しているうちに、ある日、偶然、このコースからの雪光登頂に成功したことがある。

この九月八日、登山路の分岐までの道筋を再確認しようと出掛けた。なお、登山路の分岐から雪光頂上までは、きつい坂路ではあるが小一時間で登ることができる。道も迷うことはない。

さて、当日は早朝五時二〇分に駐車した川口のＲＩＯ温泉を出発、小川口橋から草峰に登り、林道を歩く。最後の集落黒鞘六時二〇分、林道の終点（約六〇〇米）には七時三〇分に到着。いよいよ難所敷ノ山稜線の縦走路にとりかかる。歩き始めて驚いた。登山道は夏山のまっ盛りで下草に蔽われ尽くされ、先人達の踏み跡の多くは消え去っていた。感で方向を定め前進するしかない。所どころで全身が草中に没し、あげけども二進も三進も行かない情けない状態が続いた。半パンであったので、膝から下は満身創痍。数時間の悪戦苦闘の末、やっと林道のとの合流点に出会うことができた。ところがである。林道も草ぼうぼうでなかなか歩き辛いときた。目標としていた分岐点は諦め、下山にかかった。どの地点に降りつくのか検討がつかなかったが、がむしゃらに進んでいるとお馴染みの路筋を歩いていることに気づいた。雪光の登山口手水口に一〇時二〇分に到着、登り始めて五時間の苦闘は終わった。渓谷沿いのバス道を歩いて川口に着いたのは正午過ぎであった。冬枯れの時期を待って、再挑戦しようと思っている。

秦泉寺 残月記
坪井　幹之